



青森中央学院大学 地域マネジメント研究所

ACGU Regional Management Research Institute

2021年度研究所スタッフ

- 所長 小松原 聡 (戦略マネジメントコントロール)
 - 副所長 庄子 元 (地理学)
 - 研究員 岩船 彰 (地域経済)
 - 研究員 内山 清 (地域開発、新規事業構築)
 - 研究員 加藤 澄 (Systemic Functional Linguistics、コーパス言語学)
 - 研究員 北原 かな子 (日本近代史、比較文化論)
 - 研究員 塩谷 未知 (経営学)
 - 研究員 竹内 紀人 (地域観光論)
 - 研究員 木村 隆雄 (情報処理)
 - 研究員 菊池 美智子 (公衆衛生看護学)
 - 研究員 阿部 光 (建築計画、医療施設計画)
- <http://www.aomoricgu.ac.jp/publication/>

研究所事業内容

- ① 地域の諸問題やグローバルなテーマについての調査研究と研究成果の公表
- ② 他の研究機関等とのネットワーク構築と共同研究の実施
- ③ 時宜に適ったテーマ選定による公開講座やシンポジウム、セミナーの開催
- ④ 地域産業、社会を支援するコーディネート活動やアドバイス活動の展開
- ⑤ 官公庁・団体・企業等からの調査研究、計画策定研修・人材育成等の受託
- ⑥ 各種分野の講師派遣、幹旋
- ⑦ 刊行物の発行、ホームページによる情報発信
- ⑧ その他「地域マネジメント研究所」の目的を達成するための事業

受託研究・奨学寄付金の受け入れ

青森中央学院大学では、産官学連携の一環として、受託研究、奨学寄付金の受け入れをしています。詳しくは、本学ホームページをご参照いただくか、事務局研究支援・地域連携課までお問い合わせください。

青森中央学院大学地域マネジメント研究所編 『新時代で変化する社会諸相とビジネス境界の展望』出版

内容

- 憲法改正議論の争点～憲法改正を主権者として考えるために
- 組織の危機管理対策とリーダーシップのあり方
～学校組織の危機管理対応の失敗事例からの教訓～
- 自閉症スペクトラム障害と社会文化的言語背景
- 海外における日本語教育
～その目的とその先が国内にもたらすもの～
- 米価低迷下における稲作の組織化～秋田県羽後町を事例に～
- 地域の特色を活かした産業創成 グローバル化時代の観光活動
～急増するインバウンドと地域経済～
- 地方振興策としてのアートツーリズムの可能性
- 自社の歴史に学ぶ経営戦略の教育現場への展開
- サイクル・ツーリズムによる地域活性化の可能性と課題



出版社:ぎょうせい
発行:2019年3月28日
A5版 本体価格1,800円(税別)
ISBN-10: 4324800944
出版助成 公益財団法人青森学術文化振興財団
青森中央学院大学共通研究費

青森中央学院大学 地域マネジメント研究所

〒030-0132 青森市大字横内字神田12番地
青森中央学院大学 2号館4階
TEL: 017(728)0131(代) FAX: 017(738)8333
Email: research@aomoricgu.ac.jp

学校法人青森田中学園
青森中央学院大学 経営法学部・看護学部
青森中央学院大学大学院 地域マネジメント研究科
青森中央短期大学 食物栄養学科・幼児保育学科
青森中央経理専門学校
青森中央文化専門学校
認定こども園青森中央短期大学附属第一・第二・第三幼稚園

第8号
2021年4月発行



青森中央学院大学 地域マネジメント研究所ニュースレター

ACGU Regional Management Research Institute

青森中央学院大学 地域マネジメント研究所

自然資源を活用したウェルネスプログラムによるメタボ・ロコモ・フレイル予防プログラムに関する調査

「令和2年度2025年度問題に向けた課題解決型ヘルスケアサービス創出実証事業」の一環として、自然資源を活用したウェルネスプログラムの開発に協力しました。

本事業は、団塊の世代が後期高齢者になり、医療・介護費の増大が見込まれる2025年問題を見据えて、生活習慣病の予防やフレイル予防へつながるような地域住民向けのウェルネスプログラムを産官学民で連携して開発することを目指すものです。

本学地域マネジメント研究所では、プログラムの健康効果についての調査を実施しました。また、看護学部を中心とした本学学生が、モニターツアー、セラピーガイド養成講座等に参加しました。

調査については、「あおりベイトラソウオーキング&ヨガ」プログラムについて、どのような健康効果があるのか検証を行いました。本プログラムは、青森市ベイエリアコース（新中央埠頭～青い海公園～ベイブリッジ）をウォーキングするもので、浅虫で実施しているドイツ式健康ウォーキングの手法をベースとして、運動効果をより増強するノルディックウォークや、呼吸法・正姿勢を学ぶヨガも取り入れ、これらのコンテンツを潮風とともに体験できるという内容になっています。本学学生も参加した3回の実証実験では、



参加者の運動量や、プログラム前後の気分の変化を測定しました。

集まったデータの分析から、今回のウォーキングコース・内容においては、年齢、性別を問わず、“頑張らないウォーキング”の中で“心地よい疲れ”を感じながら“ネガティブな気分を改善”し、“気分転換”“ストレス発散”“活力をもたらす”ための健康増進ツールとしての活用が期待できる、ということが明らかになりました。

本学地域マネジメント研究所では、今後もこのようなヘルスツーリズムに関する研究に取り組んでいきます。

目次:

自然資源を活用したウェルネスプログラムに関する調査	1
あおりツーリズム創発塾	2
ビジネスセミナー開催	2
阿闍羅山スノーハイックプログラム造成への協力	2
学生による農作業サポート事業実施	3
研究年報第17号発行	3
2021年度研究所スタッフ	4



あおもりツーリズム創発塾

「あおもりツーリズム創発塾」は、地域や仕事の垣根を越えて、観光や地域づくりに係る方々のモチベーションと実践力を高めることを目的に実施している人材育成講座です。今年度は「アートツーリズム」をテーマに実施しました。

青森県には多様なアート資源が分布しており、八戸市や弘前市では新たなアート活動の拠点が整備され、青森にアートツーリズムの新時代が訪れつつあります。この機を捉えて、ポストコロナ・ウイズコロナ社会に対応したアートツーリズムを支える人材の養成を目指し、講座等を開催しました。



第1回講座は、「ポスト／ウイズコロナ時代のアートツーリズム」をテーマに、立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科教授 中村陽一氏（本学客員教授）からご講演いただき、後半では劇作家・演出家、畑澤 聖悟氏をパネリストとしてお招きし、コロナ禍での演劇活動等についてお話をいただきました。

第2回講座は、「アートツーリズムの地域展開」と題して、青森県立美術館館長 杉本康雄氏から、青森県内の五館連携の取組等をご紹介いただき、五所川原立佐武多制作者 福士裕朗氏、八戸市新美術館建設推進室 高橋麻衣氏も交えてパネルディスカッションを行いました。

第3回講座は、「青森のウインターアート」をテーマに、(一財)プロジェクトマッピング協会代表理事 石多未知行氏から全国のさまざまなプロジェクトマッピングや、地域資源を活かした事例等をご紹介いただきました。その他、市民グループ「ばやらぼ」代表 葛西薫氏、冬に咲くさくらライトアップ実行委員会代表 米山竜一氏、平川市経済部商工観光課課長 中畑高稔氏から各地域の取組をご紹介いただきました。

全3回の講座を通して、学生・一般の皆さまに青森のアートツーリズムの可能性を考えていただくきっかけとなりました。



ビジネスセミナー 「DX活用による組織能力高度化による地域の活性化」開催

2020年度地域マネジメント研究所ビジネスセミナーは、講師にMCS研究所の山本邦雄氏をお招きし、「DX(デジタルトランスフォーメーション)活用による組織能力高度化による地域の活性化」をテーマにお話しいただきました。

会場には学生や一般の方25名程が集まり、質疑応答の時間には「学生へ

の教育について考えるうえでとても参考となった」などの感想の他、技術伝承におけるDX活用についての質問も出されました。

今回のセミナーを通して、DX活用と組織能力高度化に関する基本的な知識や、さまざまな業種での事例などを学ぶことができました。



阿闍羅山スノーハイクプログラム造成への協力

観光庁「誘客多角化等のための魅力的な滞在コンテンツ造成」実証事業の一環として、阿闍羅山スノーハイクプログラムの健康効果について調査を実施しました。

このプログラムは、青森ワイナリーホテルを出発し、阿闍羅山をスノーハイクで巡るもので、全3回のモニターツアーを実施しました。調査は、参加者を対

象に、運動量測定、気分プロフィール検査、体験前後のアンケートを実施しました。

分析により、今回のプログラム全体が、非日常体験ができる場・機会として魅力的であり、降雪地域ならではの健康増進活動やアクティビティとしての活用が期待されるということが明らかになりました。



学生による農作業サポート事業実施



青森中央学院大学では JA ゆうき青森と連携し、東北町での農作業サポート事業を実施しています。

東北町の主要な農産物である長芋やニンニクは、稲作と比べて機械化が進んでおらず、多くの人手を必要とします。とくに植え付けや収穫といった農繁期の労働力不足は、地域の大きな課題となっています。

こうした農業の労働力不足を解決するために、「援農サークル en」が2018年に設立され、青森中央学院大学・青森中央短期大学の学生が農作業をサポートしています。2019年度からはJA ゆうき青森に「大学生アルバイト受け入れ協議会」が発足し、農繁期には週末に6~10人の学生が農作業に参加するなど、学生の農作業サポートはより一層活発になっています。

学生による農作業サポートは、農業の労働力不足の解決という効果だけでなく、農作業サポートに参加した学生にも大きな学びや関心をもたらしました。東北町で農業に触れたことで、学生たちは



「自分たちでも何か農作物を生産してみたい」という思いを持つようになりました。その結果、2019年からは青森市内の遊休農地を学生自身の手で耕し、津軽地方の伝統野菜である毛豆を栽培して



います。2019年は毛豆の収穫祭を開催し、幼稚園児から高齢者まで、多くの方々に参加していただきました。

2020年も毛豆の栽培を予定していましたが、新型コロナウイルスの感染防止対策によって、学

生の課外活動が制限され、毛豆の植え付け時期に活動することができませんでした。そこで昨年は、課外活動の制限が解除された後、遊休農地に大根を植えました。大根の栽培は初めての挑戦でしたが、天候にも恵まれ、豊作となりました。

このように援農サークル en の活動は、農業の生産場面が中心ですが、2019年からは消費場面での貢献も目指しています。2019年の翔麗祭では、援農サークル en の学生が JA ゆうき青森から野菜を仕入れ、販売する



ブースを設けました。そして、2020年は「持続可能な農業のためには、よりよい消費者育成も重要なのではないか」という気付きから、あおもりマルシェや本学のサテライトキャンパスにおいて消費者アンケートを実施しました。アンケートにご協力いただいた方々に、お礼として学生たちが栽培した大根をお渡ししたこともあり、100人以上の方から回答をいただきました。

2021年度は引き続き農作業サポートを実施するとともに、お答えいただいたアンケートを分析し、生産・消費の両面から青森県の農業に貢献していきます。

年報第17号「グローバルマネジメント地域力再発見のために」発行

グローバルマネジメント
地域力再発見のために

第17号

青森中央学院大学

【内容】

- ・行政のカスタマーハラスメントはなぜ問題なのか
- ・日中の南京事件と尖閣諸島を巡る歴史教育のパラドックス
- ・義高大接続の観点から見た大学共通テストの有意性
- ・大学センター試験についての教育法規の観点からの総括

- ・COVID-19による消費行動の停滞と商店街の変化
- ・青森県の釣獲魚種を対象とするマイクロプラスチックの分析
- ・青森県における農業就業人口の地域的特徴
- ・2019年度ドイツ農業報告の概要